

田中不二磨による教育博物館情報の摂取

高田 麻美

はじめに

本稿は、1877(明治10)年における教育博物館の設立に中心的役割を果たした文部大輔田中不二磨が、その設立にあたり、欧米の教育博物館に関して、どのような情報を摂取したのかということについて明らかにすることを課題とする¹⁾。

教育博物館は、初等・中等教育および自然科学に関係する資料を収集し、科学的な体系に基づく展示を本格的に行なった文部省管轄の博物館である。さらに、実験器具をはじめとする教育品の製作・貸し出し等の業務を実施した日本で最初の博物館でもある。同館に関して、石附実は「近代教育のショウ・ルーム」と称し、近代教育の普及に貢献したと評価している²⁾。

1876年の時点で、文部省は既に博物館を所轄しており、当時、その博物館をどのように管理・運営していくのかということが課題とされていた。文部卿不在の文部省において実質的な主宰者であった田中は、1876年3月の段階で、文部省の博物館を「専門學科生徒」のための「学術博物場」にすることを考えていた³⁾。ゆえに、その博物館は、当初から教育博物館として活動することが構想されていたわけではなかった。ところが、田中が同年5月に米国百年期博覧会へ参加し、帰国した翌年の1877年1月、彼は文部省の博物館を教育博物館として開館させる旨を決定した⁴⁾。米国百年期博覧会とはアメリカのフィラデルフィアで開催された万国博覧会であり、その主要テーマの一つが教育であったといわれている⁵⁾。文部省はこの博覧会に関心を寄せていたため、博覧会事務局から派遣される代表とは別に、文部省から独自の使節団をフィラデルフィアへ派遣した。そのメンバーは、田中、畠山義成、阿部泰蔵、手島精一、出浦力雄の5名であった⁶⁾。また、田中の配偶者であった田中須磨も、フィラデルフィアに同行したという⁷⁾。

上述した文部省博物館の名称変更の理由について、従来の研究では、1876年に「加奈陀政府教育家代表者」(おそらくカナダのオンタリオ州文部省副長官ジョン・ホジンス(John G. Hodgins)であろう)の勧誘で、田中がカナダのトロント教育博物館を訪問した際、同館の影響を強く受けて、教育博物館構想を固めたということが指摘されている⁸⁾。また、溝上智恵子は1850年代を中心としたトロント教育博物館の活動内容を明らかにし、田中が日本の教育博物館設立の際に「導入したもの」を検討している⁹⁾。

溝上以前の研究において、田中が見学したトロント教育博物館の活動内容は不問にされてきた。それゆえ、同館の活動に焦点を当てた溝上の研究は高く評価される。だが、そこには以下に掲げたような課題が残されていると考えられる。それは、①田中が見学した1876年当時の展示内容が詳述されていないこと、②田中がいつ、誰と同館を訪問したのかについて明らかにされていないこと、③田中が「導入したもの」について再考を要する点がいくつかみられること、である。

先行研究ではあまり言及されていないが、実のところ、田中はトロント教育博物館を見学する以前に、教育博物館に関する情報を得る機会に恵まれていた。それは、博覧会会期中に開催された「万国教育会議」(International Conference on Education)¹⁰⁾である。そこでは、教育博物館をテーマとした報告と意見交換の場が設けられており、田中も出席していたと推察される¹¹⁾。ゆえに、田中がどのような情報を参考にして教育博物館を設立したのかを明らかにするにあたって、同会議の内容はその手がかりになると考えられる。

以上のことを踏まえ、本稿では上述の課題について、次の三つの方法に即して検討していく。

第一に、万国教育会議における教育博物館の報告と意見交換の内容を分析する。具体的には、万国教育会議の逐語記録を用いて教育博物館の報告内容を、特にトロント教育博物館について説明したホジンスの報告を中心に整理した後、報告後に行なわれた意見交換の内容をみていく。そして、これらの作業を通じて、この会議において教育博物館がどのようなものとして理解されたのかを明らかにしていく。

第二に、田中のトロントまでの足取りと1876年当時のトロント教育博物館の展示内容を確認する。具体的な作業として、まず、前出の阿部が著した「北米記行」を用いて、田中がトロント教育博物館を見学するまでの日程と同伴者を示す。「北米記行」は、教育博物館に関する研究のなかであまり着目されてこなかった史料である¹²⁾。だが、そこには田中のトロントまでの足取りが詳細に記されており、重要な史料だと考えられる。次に、オンタリオ州文部省書記官アレクサンダー・マーリング(Alexander Marling)の著作から1876年当時の同館の展示内容を探っていく。マーリングの著作も、これまでの教育博物館成立史において紹介されていないが、トロント教育博物館の展示内容を知るうえで重要な史料だと考えられる¹³⁾。

第三に、万国教育会議の議論とトロント教育博物館の活動内容を踏まえ、成立した日本の教育博物館のコンセプトから田中が実際に得た情報を確認する。

以上、三つの検討を行なったうえで、田中が日本の教育博物館設立にあたって海外からいかなる情報を摂取したのかを描出していく。

1. 万国教育会議における教育博物館

万国教育会議は、米国百年期博覧会会期中の1876年7月17日と18日の二日間にわたって開催された「非公式の教育国際会議」であった¹⁴⁾。1874年の全米教育協会(National Educational Association)の席上、アメリカ合衆国教育局長官ジョン・イートン(John Eaton)はこの会議の開催を提案し、これによって、博覧会の教育部門の成果をより実のあるものにすることができると考えていたのだという¹⁵⁾。当初、この会議は公式の国際会議として構想されていたが、結局のところ実現されなかった。そこで、イートンが働きかけ、代わりに非公式の国際会議の開催が決まった。そして、各国の教育関係者は公的な立場ではなく私的な立場でこの会議に参加することとなったのだという¹⁶⁾。

出席者一覧によると、二日間で総勢13ヶ国、113名が参加し、日本からは田中と通訳の目賀田

種太郎、学監デイビット・マレー (David Murray) の3名が出席したことがわかる¹⁷⁾。会議は5回に分けて開かれ、教育博物館がテーマになった4回目のセッションは、18日の午後3時からペンシルヴェニア教育館にて開催された¹⁸⁾。

会議の逐語記録より、田中が18日の3回目のセッションに出席していたことが確認できる¹⁹⁾。また、博覧会中、田中はこの万国教育会議のほかに、「萬國教育家大會」へも「毎回出席」していた²⁰⁾。教育会議に対する田中のこうした積極的な姿勢を踏まえると、彼は4回目のセッションにも出席していたことが推察される。

会議の報告者は事前に決められており、教育博物館については、オンタリオ州文部省副長官ホジンス、ドイツのニュルンベルク工芸学校教員ジールホルスト (G. Seelhorst)、オーストリア博覧会使節長ミゲルカ (F. Migerka) の3名が報告を行なった。そして報告が一通り終わった後、意見交換に入るとい形式が採られた。報告と意見交換の場では、出席者から教育博物館の目的や展示品についてさまざまな意見が出された。田中はこの会議で、教育博物館に関するさまざまな報告や意見を聞いていたとみられる。したがって、田中による教育博物館に関する情報の摂取を検討するにあたって、この万国教育会議における教育博物館に関する発言をみておく必要がある。

(1) 各報告の内容

最初の報告者であったホジンスは報告の冒頭で、実は「ロシア代表がこのテーマの最初の報告を行なうのを期待していた」²¹⁾ことを明かした。というのも、彼はロシアの教育博物館（おそらくサンクトペテルスブルグにある教育博物館）²²⁾が、国立の博物館のなかで初めて教育博物館という名が付けられたものであったからだという。当時、ホジンスが関わっていたトロント教育博物館は州立師範学校内の一施設であり、独立した施設ではなかった。おそらくホジンスは独立した施設としての教育博物館を語るのであれば、トロントよりもロシアの教育博物館の方が適切だと考えていたのではなかろうか。しかし、ロシアではなくカナダ代表が報告者として選ばれたのは、トロント教育博物館が世界で最初の教育博物館であったことが考慮されたからだと思われる。

ホジンスによると、トロント教育博物館は「二つの要素を兼ね備えている」という。「二つの要素」が何であるのかは明言されていないが、彼の報告内容から次の二点を指すと考えられる。すなわち、一点目に、教科書や地図など「教師という仕事に関連する品々〔ここでは、教授関連コレクションと括る〕は、可能な限り完全に集めている」ということ、二点目に、芸術コレクションを収集していることである。以下では、これら二種類のコレクションに関するホジンスの発言を整理していく。

ホジンスは教授関連コレクションに関して、「〔トロント教育博物館では〕イングランドとアメリカで我々が入手できるあらゆる教科書」を収集し、それらは「非常に価値があり」、「これらを研究するどの教師にとっても大変有益である」と述べた。さらに同館ではアメリカ、フランス、ドイツなどから集めた「学校における指導の実例を示す地図、表、器具」のサンプルも所蔵していることを語った。

次に、芸術コレクションに関するホジンスの発言をみていく。特筆すべきは、彼が教授関連コレ

クションと比べて、芸術コレクションの方により長い時間をかけて詳細な説明を行なったという点である²³⁾。報告のなかでホジンスは、トロント教育博物館が所蔵する芸術コレクションとして、ヨーロッパにおける有名画家の作品（多くは複製品）、カナダ史やヨーロッパ史における著名人の胸像、歴代英国王位継承者の紋章、ニネヴェ遺跡の出土品などを紹介している。特にニネヴェ遺跡出土品は広い展示室に飾られ、その展示は権威ある英国人考古学者レイヤード（A. Layard）からの指導を受けたという²⁴⁾。その展示室にはレイヤードが入手したエジプト人の死体安置台も展示され、その彩色を復元したことが報告された。これらのことから、当時のトロント教育博物館が芸術コレクションの収集・展示に比重を置いていたことがうかがえる。その理由についてホジンスは、カナダに住む人々は他国へ行くことが少なく、彼らの多くが芸術の類に触れる機会がほとんどない。そこで同館に芸術コレクションを置くことで、教師の審美眼（taste）を養い、さらに教師たちを介してカナダの生徒や人々の情操教育に役立てようと考えていたのだという。

以上から、トロント教育博物館における二種類のコレクションは、いずれも教師の資質向上を目的として、収集・展示されていたことが読み取れる。

ホジンスの報告の後、質疑応答の時間に入った。その際、①展示品収集にかかった費用、②自然史コレクションの展示方法、③「教育ディポジトリ」（Educational Depository）²⁵⁾が寄付を受けているか否か、という質問が出された。ホジンスは、①について、展示品は20年かけて少しずつ集めたので、経済的負担は少ないと回答した。②に対しては、大きな鳥類のコレクションを展示する場合、展示室を二分して、片方に燕雀目の鳥を、もう一方へ水鳥を配置していると説明した。③に関して、教育ディポジトリはほとんど寄付を受けていないと答えた。続けて彼は、教育ディポジトリについて詳しく説明している。彼によれば、教育ディポジトリは地図や学校用品を製作し、学校へ販売する機関であるという。また、製作品の半額はオンタリオ州が負担するので、学校側は安く製品を購入でき、その結果、州内の学校にはある程度の教育品が備えられるようになったのだともいう。

ホジンスの報告は、トロント教育博物館における芸術コレクション展示の説明に比重を置いていた。それにも関わらず、彼への質問は、自然史コレクションの展示や教育ディポジトリという、学校教育に直結することに集中しており、出席者の関心がトロント教育博物館における芸術展示よりも学校教育関連の活動の方に向いていたことがうかがえる。

次に報告したジールホルストは、工芸を専門としたニュルンベルク博物館の活動を報告した²⁶⁾。彼の報告時間は、ホジンスと比べてとても短かったようである²⁷⁾。報告によれば、同館は1867年に工芸の学校と関わりをもつ施設として設立され、あらゆる時代を象徴する工芸や産業に関わる資料を展示しているという。展示は、製品の雛型が改良されていく様子がわかるように工夫が凝らされていたようである。来館者については、多くが一般人や工芸学校の生徒だったという。

最後の報告者であったミゲルカは、工芸博物館の報告を行なう予定であった²⁸⁾。しかし、先にジールホルストが同じテーマで報告していたため、報告テーマを変更してオーストリアにおける生徒の指導の在り方を述べた。

(2) 意見交換の内容

3名の報告が終わった後、会議は意見交換の時間に入った。

最初に発言したホイット (J. W. Hoyt) は、諸外国の博物館事情を聞くことができたのは大変興味深いことだと述べたうえで、「各国に最低一つの包括的な教育博物館が設立されることは、極めて重要である」と発言している²⁹⁾。彼は具体的に、各国の教育博物館はロシアの教育博物館にならうのが良いとし、「様々な器具、使用教科書の見本、博物学の説明に役立つような標本、各種の学校用備品、様々な学校の生徒が作った出来の良い、あるいは、出来の悪い作品」などを展示してはどうかと提案した。さらに彼は、そうした教育博物館の活動は教師や教育長、学校教育に従事する人たちが、他の学校や海外で行なわれている教育の状況を把握するのに役立つだろうと述べた。

彼が提案している教育博物館における展示品はトロント教育博物館の教授関連コレクションと似ているものの、その対象を教師だけでなく、教育長などの教育関係者へと広めている点が特徴的である。

ホイットは続けて、ワシントンにも「このような〔ロシアの教育博物館のような〕特徴をもつ」というアメリカ合衆国教育局下の教育博物館が設立されることを述べたうえで、同館設立の理由について、「今回の大規模な博覧会と、博覧会の教育部門に資料が集まった結果」だとした。

これに関連して、彼はオーストリアの教育博物館が設立された背景について話し始めた。というのも、ウィーン博覧会が開催された際、ホイットはアメリカの教育部門展示の担当としてウィーンに渡っており、その背景を知っていたからであった。彼によると、オーストリアの教育博物館は、同国の教育大臣 (minister of public instruction) が、ウィーン博覧会の成功を受けて、教育のための博物館に関心を持つようになり、資料を集めだしたことが設立の契機になったのだという。さらに、その大臣はホイットに対して、「省と関わりのある教育博物館をウィーンに設立することの重要性」を説いたという。それをうけて、ホイットは、博覧会のアメリカ代表として、オーストリアの教育博物館設立のために、教材をはじめとする様々な教育関係品を贈呈したことを語った。ホイットがオーストリアの教育博物館のことを持ち出したのは、おそらく同館と同様に、ワシントンの教育博物館も万博を契機に設立されたこと、教育行政機関の下に設置されたこと、そして世界中の教育品を収集していたことが共通していたからであろう。

オーストリアの教育博物館のことを一通り述べた後、彼は場内にいる教育家たちに対して、今日においても教育博物館設立のために資料収集を始めることを奨励すると同時に、その事業を完遂すべきことを訴えかけた。

次に発言したトラヴェリー (S. J. Travelli) は、先のホイットの話聞いて喜ばしいとコメントしている³⁰⁾。トラヴェリーは、数か月前に教育局を訪れた際、「有益な資料」が飾られていない「小さな建物」を目にしたことを語った。だが、この度、そこに「これ以上ないくらい、実用的で重要な資料が置かれることになったことを聴衆に向けて述べている。おそらく「小さな建物」とは、近々設立されることになるワシントンの教育博物館を指しているのであろう。この発言から、彼がワシ

ントンの教育博物館の取り組みを高く評価していることがうかがえる。

最後に、議長フェルプス(W. F. Phelps)は、聴衆に対して、ワシントンに教育博物館が設立されることが決まったことを改めて報告した。そのうえで、彼は国内に教育博物館を設立する意義について、自らの意見を述べた³¹⁾。当時のアメリカには「非識字者」が600万人も存在しており、議長は今後のアメリカの発展のために、そうした人々に対して「適切な教育」を行なうことが必要ではないかと投げかけた。そして、「こうした重要な問題についての議論が、ここに参加しておられる教育者の方々に教育博物館設立の重要性を自覚せしめたのならば、本会議を実施するためのあらゆる努力に匹敵するような仕事を成し遂げたでしょう」と結んだ。つまり、議長は「非識字者」を対象とし、彼らに「適切な教育」を施す場としての教育博物館を提唱していた。しかし、館内で行なう具体的な活動案については、逐語記録からは読み取れない。

以上、意見交換における議論をみてきた。意見交換の場では、教育博物館を設立することの重要性が確認されたことが特徴的であった。既述の通り、報告の場では、ホジンスがトロント教育博物館の展示、特に芸術コレクションについて説明し、次にジールホルストが工芸専門のニュルンブルク博物館のことを報告した。ところが、意見交換では、芸術や工芸の展示については全く触れられず、ロシア、オーストリア、ワシントンの教育博物館における活動に焦点が当てられ、特にロシアとワシントンの教育博物館では、専ら普通教育に資する活動を行なっていることが述べられた。加えて、上述のホジンスに対する質問事項をみても、ほとんどが普通教育に関連することであった。以上から、出席者の関心は芸術や工芸ではなく、普通教育と関わりをもつ教育博物館の活動に向いていたことが推測される。

冒頭で確認した通り、田中たちが帰国した後、文部省の博物館は学術博物場から初等・中等教育普及を目指す教育博物館へと、その性格が変更された。この性格変更に関して、従来の研究では田中がトロント教育博物館を見学したことが直接の契機とされてきた。だが、田中がトロント教育博物館に出席する以前の万国教育会議の時点で、一般的に教育博物館というものが普通教育の展示を行なう場だと認識するようになったとしたら、そうした視点をもってトロント教育博物館を見学したと考えられる。

加えて、フェルプスは、オーストリアやワシントンの教育博物館が教育行政機関と結び付いていたことを紹介した。文部省管轄の博物館設立において主導的役割を果たしていた田中にとって、教育行政機関下に置かれた教育博物館の話は、示唆に富むものであったと推察される。したがって、田中が文部省の博物館を教育博物館として設立させようと考えた一つの要因として、このフェルプスの発言を参考にした可能性があるだろう。

さらに、議長から、「非識字者」に「適切な教育」を与える場としての教育博物館に関する意見が出された。日本では1872年に「学制」が制定されたものの、当時の就学率は40%弱と低迷していた。田中はフェルプスの意見をうけて、未就学児童に対する適切な教育を施すために、教育博物館を設立することを意識するようになったとも考えられる。

2. トロント教育博物館の視察

次に、トロント教育博物館についてみていく。既述の通り、先行研究において、田中がいつ、誰とトロント教育博物館を訪れたのかが把握されておらず、加えて、1876年当時におけるトロント教育博物館の活動、特に展示内容があまり明らかになっていない。同館に何が展示されていたのかを知ることは、日本の教育博物館へ及ぼした影響を検討するのに必要であると考えられる。

(1) 田中の足取り —阿部泰蔵「北米記行」を用いて—

田中がトロント教育博物館訪問の機会を得たのは、先述した田中の「教育瑣談」によると、「加奈陀政府教育家代表者」が「切りに自ら^マトロント市に經營せるものを稱し、來り觀んことを勸められたからだという³²⁾。この「加奈陀政府教育家代表者」とは、後述するように、田中とトロントの諸施設を一緒に巡ったホジンスを指すと考えられる。よって、田中はホジンスに誘われて、実際にトロント教育博物館へ赴いたといえよう。

前述の万国教育会議において、トロント教育博物館のほかにロシアやドイツ、オーストリアにある教育博物館の活動も話題にのぼった。しかし、それらは米国百年期博覧会が開催されていたフィラデルフィアから地理的に離れていて、すぐに訪問することが難しかった。一方、トロントはフィラデルフィアから遠くなく、交通網も発達していたため、田中たちも容易に訪問できるトロント教育博物館の見学を選んだ可能性がある。なにより、オンタリオ州が博覧会で展示した教育品が優れており、高い評価を受けていたことが決め手となったのではなかろうか³³⁾。かくして、田中はトロントに赴くことになった。

冒頭で触れた通り、田中がいつトロント教育博物館を訪れたのかは、これまでに明らかにされていない。しかしながら、阿部泰蔵が記した「北米記行」から、田中の足取りを確認することができる³⁴⁾。

それによると、博覧会での活動に区切りがついた1876年8月25日から、田中は北米視察に赴いたという。そして、田中のほかに、阿部、手島、出浦、須磨の5名がこの視察に同行した。視察は同年10月16日までの53日間にわたり、一行はアメリカ北部、カナダのオンタリオ州やケベック州にあるさまざまな施設を巡ったという。オンタリオ州訪問の際、彼らはトロント教育博物館を見学したと推察される。ここで、一行のトロントまでの足取りを辿ってみたい。一行は、1876年8月25日の金曜日にフィラデルフィアを発ち、ウォトキンズやロチェスターなどを經由し、アメリカを北上した。途中でナイアガラの滝などを観光し、9月2日土曜日の午後2時頃にトロントへ到着した。田中たちは「クウキンスホテル」(クィーンズ・ホテル)に投宿し、夜になると「ホツヂンス父子」が一行のもとを来訪したという。「ホツヂンス」とはホジンスのことであろう。

そしてトロント到着から二日後、9月4日条に「四日晴午前ホツヂンス氏并学監某氏ト共ニ大学校小学校師範学校州庁議事堂等ヲ見物シ夜劇場ニ行ク」と記されており、この日に田中たちはトロント教育博物館を訪問したとみられる。日記の記述に従うと、田中たちは午前から夜までの間に、師範学校を含むトロント内の施設を4ヶ所以上見学したことになる。現時点で彼らが見学した「小

表1 1876年におけるトロント教育博物館展示品

分類	内容	分類	内容
エジプトやアッシリアの彫刻	アッシリアのレリーフ板 有翼牡牛像 古代エジプトの立像や胸像など	装飾品	青銅などの正確な複製物 装飾平皿 磁器製品 水晶製品
像・模型	古代や中世の象牙彫刻をかたどった型 宝石やメダルをかたどった型 レリーフの地図や図面 古代と現代の立像や胸像 ロジャーズ・グループの塑像 建築模型	印刷物	石版画 多色石版画 写真
		自然科学関係	植物に有害な虫の標本 医療等に有用な虫の標本 博物学の標本 地質標本 農業器具の模型 自然科学模型
絵画	流派 イタリア派、フランドル派、 オランダ派、ドイツ派、 フランス派、スペイン派	学校関係	学校器具や備品
	歴史 中世史の挿絵 武器や甲冑などを着た人物図		

(Alexander Marling “The Educational Museum and Library” *The Canada educational directory and year book for 1876*, Hunter, rose & co., 1876, p.131 をもとにして筆者が作表した。分類は筆者による)。

学校」は不明であるため、残りの三つの施設と宿泊していたクィーンズ・ホテルの位置関係を確認する。1878年に発行された“Map of Toronto”をみると、ホテルや「州庁議事堂」(Parliament Building)から「師範学校」や「大学校」まではわずか2キロほどであり、施設間の移動時間は徒歩でもせいぜい30分から40分程度だったと考えられる³⁵⁾。

また、トロント教育博物館の展示規模に目を向けてみると、同館は大英博物館のように独立した博物館施設でなく師範学校内の施設であったため、展示室は師範学校2階フロアのうちの6部屋だけであったという³⁶⁾。このように展示室があまり多くなかったので、館内を一巡するのにそれほど長い時間は要さなかったとみられる。

以上より、田中たちが午前から夜までの時間をほとんど施設見学に充てたとすると、移動に費やす時間は長くなく、展示規模もそれほど大きくなかったので、トロント教育博物館を一巡する程度の時間は充分にあったと推察される。

(2) 1876年におけるトロント教育博物館の活動

次に、トロント教育博物館がどのような活動を行っていたのかをみていく。同館設立の経緯や1850年代における同館の活動実態は、溝上の研究が詳しい³⁷⁾。だが、田中が同館を見学した1876年当時の活動に関しては、あまり明らかにされていない。したがって、本節では、1876年当時におけるトロント教育博物館の展示活動について紹介する。

展示に関しては、先述した通り、ホジンスが万国教育会議でその概要を述べており、田中もそれを聞いていたと考えられる。しかし、ホジンスが紹介したのは、トロント教育博物館が所蔵する展示品のうちの一部である。田中が日本の教育博物館設立に際して摂取した情報を検討するにあたって、彼が目にしたと考えられる他の展示物も確認しておく必要がある。

上の表1は、1876年におけるトロント教育博物館の主な展示品を分類したものである。

トロント教育博物館の展示品は、表1のように、「エジプトやアッシリアの彫刻」「像・模型」「絵画」「装飾品」「印刷物」「自然科学関係」「学校関係」という7項目に分類される。この分類から、同館にはさまざまな美術コレクションが展示されていたことがわかる。史料の制約により、各展示の点数は不明である。だが、万国教育会議上のホジンスの報告内容を踏まえると、当時のトロント教育博物館は美術コレクションの展示に力を入れていたことが推察される。

とはいうものの、田中は、芸術コレクションよりも、学校関係コレクションの方に関心が向いていた。彼は後年、「教育瑣談」でトロント教育博物館に関して、次のような感想を述べている。

…各種教育の論説、学校管理の方法、校舎の設計圖案、諸般の標本、教科書、器具、諸生徒事業成績より、幼稚園兒童の遊戯品、玩具等に至るまで、苟も教育に關せる須用の事物は、細大網羅せざるは無く、一度其内に入るや、百般の研究、參考に資すべく、甲乙の良否亦指顧の間^{ママ}に選擇するを得べし³⁸⁾

このように述べる一方で、「教育瑣談」のなかで芸術コレクションに関する記述はみられない。したがって、田中がトロント教育博物館を見学して、最も印象に残ったのは、教育に関する展示物であったことがわかる。

その学校教育関係のコレクションに関して、前章で言及した教育ディポジトリーも師範学校内に設置されていたため、田中ら一行は、師範学校見学時に教育ディポジトリーも見学した可能性が高い。

3. 田中が教育博物館へ導入したこと ―設立された教育博物館のコンセプトから

日本の教育博物館設立に際して、田中が見聞した事柄のなかから何を摂取したのかについて検討していく。その際、参考となるのが溝上智恵子の研究成果である³⁹⁾。溝上は、日本における教育博物館の成立について、トロント教育博物館の活動と日本の教育博物館の活動を比較し、田中が「導入したもの」を析出している。しかし、上でみてきたように、田中はトロント教育博物館見学時だけでなく、万国教育会議に出席した時も教育博物館の情報を入手する機会に恵まれた。したがって、本章では万国教育会議での議論とトロント教育博物館の活動内容の両方を踏まえ、実際に設立された教育博物館のコンセプトから、田中がどのような教育博物館情報を摂取したのかを再検討してみたい。

まず、溝上の到達点をここに示しておく。溝上は、田中がトロント教育博物館から日本の教育博物館へ導入したこととして、(A) 自然科学教育重視の展示、(B) 実物教育を実現するための博物館というコンセプト、(C) 教育ディポジトリーの機能、(D) 入館料無料の制度、の4点を挙げている。だが、(A)・(B)・(D)については再考の余地があると考えられる。

田中は、米国百年期博覧会に参加する以前から、文部省の博物館を(A)と(B)の機能を備えた施設にしようと考えていた。というのも、冒頭で触れた学術博物場は、その構想の段階で既に「各

地方ヨリ採集スル動植物金石等」の収集が始まっており、それらを排列することが念頭に置かれていたからである⁴⁰⁾。したがって、(A)と(B)はトロント教育博物館の見学を契機に導入が検討されたというよりも、元々、文部省博物館が備えておくべき機能として捉えられていた可能性が高い。(D)の料金に関しては、田中はトロント教育博物館だけでなく、大英博物館をはじめとする無料の博物館を視察していたため、一概にトロント教育博物館をならって、入館料を無料にしたとは言いきれないだろう。

では、田中は日本の教育博物館設立にあたって、何を摂取したのであろうか。トロント教育博物館の活動だけでなく、万国教育会議における議論も踏まえると、次の3点に集約される。

1点目は、初等・中等教育に関する展示品を収集することであった。1877年に定められた「教育博物館規則」の前文において、「教育博物館ハ文部省ノ所轄ニシテ凡ソ教育上必需ナル内外諸般ノ物品ヲ蒐集シ」⁴¹⁾と、教育博物館は教育に関わる資料を集める博物館であることが明記されている。

既述のごとく、田中は当初、文部省の博物館を学術に貢献するための施設として構想していた。しかし、彼が帰国後に設立したのは学術博物場ではなく初等・中等教育に資する教育博物館であった。溝上はこれに関して、「…当時のトロント教育博物館は、実は美術品や古代エジプトの芸術品が主たる展示内容の「教育博物館」であり、教育博物館という名称から類推されるような初等・中等教育のための博物館機能はそこごく一部にすぎなかった。しかしこの一部にすぎなかった機能に田中不二磨は着目したのである」⁴²⁾と述べている。だが、先述した万国教育会議の議論を踏まえると、違った解釈をすることが可能となる。

万国教育会議では、教育博物館が普通教育を軸に据えた展示を行なうものだという論調が強かったことを第1章で確認した。会議に出席した田中もそうした視点に着目するようになったと仮定すれば、彼はトロント教育博物館を見学する前から、初等・中等教育のための博物館機能に焦点を当てていたことになる。さらに、意見交換の場では、教育行政機関と結び付いた教育博物館を設立することの必要性についても触れられた。したがって、田中はトロント教育博物館見学を契機に、同館の「一部にすぎなかった〔教育の〕機能」に着目したというよりも、文部省が管轄するにふさわしい博物館を設立するために、既に教育の機能に焦点を当てて見学に臨んでいた可能性がある。

2点目は、教育博物館が教育を専門とする人々を主な対象者としたことである。既出の「教育博物館規則」前文において、教育博物館が「教育ニ従事スル者ノ搜討ニ便シ兼テ公衆ノ來觀ニ供」するための博物館であると規定されており⁴³⁾、対象者の筆頭に「教育ニ従事スル者」が挙げられている。また、田中が「…〔教育博物館は〕殊に教育者の研究に供」するものと捉えていたことを踏まえると⁴⁴⁾、教育博物館が「教育ニ従事スル者」あるいは「教育者」を主たる対象としていたことは歴然である。学術博物場が対象としたのが「専門學科生徒」であったことと比べると⁴⁵⁾、教育博物館ではその主たる対象者が、学習者から教育者へ転換していることがわかる。この対象の転換に関して、田中は、教師を主な対象としたトロント教育博物館だけでなく、万国教育会議におけるホイットンの発言を参考にしたのではないかと考えられる。

3点目は、教育ディポジトリの機能の導入であり、これは先述の溝上も(C)で掲げるところ

である。第2章において、教育ディポジトリーが学校で使用する教科書や教材を製造し、学校に廉価で販売していたことを紹介した。これもまた、「教育博物館規則」をみると、日本の教育博物館においても同様の業務を実施することが決定されたのがわかる。

というのも、同規則において、同館では学校教育に必要な外国の教材購入の仲介を行ない、館内展示品のなかから学校教育に有益な資料を模造し、学校へ貸し出す、あるいは払い下げるという業務を行なうことが規定されている⁴⁶⁾。こうした事業を行なうことになった背景に、当時、日本国内に教材を製造・販売する会社や団体がほとんど存在しなかったため、「教育不便少カラス實ニ遺憾ト云フヘシ」⁴⁷⁾という状況があったことが考えられる。それゆえ、田中はこうした日本の教育状況を解消するために、教育ディポジトリーをモデルにし、日本の教育博物館でも同様の業務を行なうことで、国内の学校に教育用品を普及させようとしたのではなかろうか。

おわりに

本稿において検討した内容をまとめると、次の通りである。

田中が出席したとみられる万国教育会議では、ホジンスとジールホルストがそれぞれの国における教育博物館の活動を報告した。ホジンスはトロント教育博物館に教授関連コレクションと芸術コレクションがあると紹介し、特に後者の説明に重点を置いた。続いてジールホルストは、ニュルンベルク博物館では工芸中心の展示が行なわれていることを報告した。しかし、ホジンスに対して寄せられた質問は、芸術コレクションに関するものでなく、自然史や教育ディポジトリーという教育関係のことに集中した。さらに、会議が意見交換の時間に入ると、発言者たちは美術や工芸のことには全く触れず、普通教育に資する教育博物館の活動の方に話の焦点が当てられたことがわかった。

会議終了から一ヶ月後、田中は北米視察に赴く。そしてホジンスとともに、トロント教育博物館のある師範学校を見学した。当時のトロント教育博物館では、主として芸術コレクション展示に力が入られていたことは上述の通りである。しかし、田中は芸術コレクションには注目せず、教育に関する展示物に興味を持ったのであった。さらに、田中たちはトロント教育博物館だけでなく、師範学校内に置かれていた教育ディポジトリーも同時に見学した可能性が高いことも指摘した。

以上のことを踏まえ、設立した日本の教育博物館の活動から、田中が欧米の教育博物館から摂取した情報を検討した。彼が摂取したことは、①初等・中等教育に関する展示品を収集したこと、②教育博物館が教育者を主な対象者としたこと、③教育ディポジトリーの機能の導入、の3点であったと考えられる。

これまで日本の教育博物館の設立については、トロント教育博物館との関係で論じられてきた。だが、本稿の検討を通じて、田中はトロント教育博物館だけでなく、万国教育会議でさまざまな教育家たちの話を聞き、それらを参考にしながら、日本の教育博物館を設立しようとした可能性があることが明らかになった。

最後に、今後の課題について述べておく。本稿では、教育博物館設立にあたって田中に焦点を当

てながら、彼が教育博物館に関する海外情報のなかから何を摂取したのかを検討してきた。現時点でわかっている田中の情報源が万国教育会議とトロント教育博物館であったため、本稿ではこの二つを中心に論を展開してきた。今後、田中が接した他の情報源についても調査を進めていくことが求められる。それと並行して、トロント教育博物館や米国百年期博覧会についても調査していく必要がある。

さらに教育博物館設立にあたっては、田中だけでなくマレーや手島らも活躍したことが既に指摘されている。それゆえ、田中以外の人物が教育博物館設立に対して、どのような役割を果たしていたのかに関しても、今後明らかにしていかなければならないだろう。

〔注〕

- ¹⁾ 教育博物館の研究は、近年着実に蓄積されてきている。たとえば、石附実『教育博物館と明治の子ども』（福村出版、1986年）では明治20年代までの教育博物館の活動概要が、椎名仙卓『日本博物館発達史』（雄山閣出版、1988年）や国立科学博物館編『国立科学博物館百年史』（第一法規、1977年）では国立科学博物館に至るまでの歴史的経緯が描出されている。内川隆志「デイビッド・マレーと田中不二磨 —明治初期における教育制度と博物館—」（國學院大學博物館学研究室『國學院大學博物館學紀要』第28巻、2003年）は、田中とマレーが教育博物館設立に際して、どのように関わったのかを整理している。

田中不二磨（1845-1909）は、尾張藩出身。1871年に岩倉使節団理事官に任ぜられ、欧米諸国の国民教育制度の調査を行ない、その成果を『理事功程』にまとめた。1874年から文部大輔に就き、1879年に教育令を制定した。しかし、教育令が学校教育の「停滞」を招いたとされ、責任を問われた田中は1880年に司法卿に配転させられることとなった（土屋忠雄「田中不二磨と教育令」『文部時報』通号1022号、1962年、273-279頁、森川輝紀「田中不二磨と教育令—近代教育の岐路をめぐって—」埼玉大学教育学部『埼玉大学紀要 教育学部（教育科学）』第35巻、1986年、39-63頁を参照）。田中の名前の表記方法は、「不二磨」と「不二麻呂」の二通りあるが、本稿では前者を採用する。

- ²⁾ 注1・石附前掲書、166頁。
- ³⁾ 田中不二磨「學術博物場建設之義ニ付伺」1876年3月22日付（注1・国立科学博物館編前掲書、40-41頁）。ここでいう「専門学校」は、「学制」において「外国教師ニテ教授スル高尚ナル学校法学校理学校諸芸学校等ノ類之ヲ汎称シテ専門学校ト云フ」と規定されているものを示す。
- ⁴⁾ 田中不二磨「東京教育博物館改稱之儀御届」1877年1月26日付（注1・国立科学博物館編前掲書、62-63頁）。
- ⁵⁾ 石附実「フィラデルフィア博覧会と日本の教育」吉田光邦編『一九世紀日本の情報と社会変動』京都大学人文科学研究所、1985年、428頁。
- ⁶⁾ 注5文献、431-433頁。
- ⁷⁾ 田中薫「すばらしい明治の女 私の祖母の人生記録（2）—田中須磨 自叙口述」田中千代学園

編『服装』第5巻第4号、1978年、73頁。

- 8) 注1・国立科学博物館編前掲書(61-62頁)、権名仙卓『明治博物館事始め』(思文閣出版、1989年、157-158頁)を参照。
- 9) 溝上智恵子「19世紀半ばのトロント教育博物館」文化経済学会『文化経済学』第22号、2007年、61-63頁。
- 10) 「万国教育会議」の邦訳は、溝上智恵子「教育博物館誕生 一万博における日加の出会い」(日本カナダ学会『カナダ研究年報』第27巻、2007年、22頁)によった。
- 11) 田中が同会議に出席していたことは、これまでに溝上や吉家定夫によって指摘されている(注10文献、22-23頁と、吉家定夫『日本国学監デイビッド・マレー ―その生涯と業績―』玉川大学出版部、1998年、171頁を参照)。
- 12) 阿部泰蔵「北米記行」『阿部泰蔵一代記』私家版、出版年不明。「北米記行」は、埜上衛がその存在を指摘しているが、詳細には検討されていない(埜上衛「田中不二麻呂の前半生と西洋」有坂隆道編『日本洋学史の研究VI』創元社、1982年、281頁)。
- 13) Alexander Marling “The Educational Museum and Library” *The Canada educational directory and year book for 1876*. Hunter, rose & co., 1876.
- 14) Department of the Interior, Bureau of Education, *International Conference on Education held at Philadelphia, July 17 and 18, in connection with the International Exhibition of 1876* (1876, p.7)を参照した。
- 15) 注11・吉家前掲書、170頁。
- 16) 注14史料、p.7.
- 17) 注14史料、pp.88-92. 会議出席者一覧に記載されている“Tanetaro Megato”は、目賀田種太郎を指すと考えられる。1876年8月24日、博覧会で当時のアメリカ大統領グラント(U. Grant)らが「支那留学生」を饗応した場に、田中と目賀田も同席していた。そして田中は日本語で演説を行ない、目賀田はそれを英語に通訳したという(注12・阿部史料、91丁)。このことから、目賀田が田中の通訳として会議に同席したとみることができる。
- 18) 注14史料、p.70.
- 19) 注14史料、p.68.
- 20) 田中不二麻呂「教育瑣談」大隈重信撰、副島八十六編修編『開國五十年史』上巻、開國五十年史發行所、1907年、710頁。「萬國教育家大會」とは、ジョージ・ビアード(George P. Beard)が中心となって企画した「百周年師範研修会」(Centennial Normal Institute)を指しているとみられる。この研修会は、世界各国の教育関係者と会合を開き、意見を交換することを目的とし、7月5日から6週間続いた(注11・吉家前掲書、169頁)。
- 21) ホジンスの報告内容は、注14史料、pp.70-74による。
- 22) Benjamin R. Andrews “Museum of Education” (*Teacher’s College Record*, Vol. IX, No.4, The Columbia University Press, 1908, p.39)によれば、1876年当時、ロシアに設立されていた教育

博物館はサンクトペテルスブルグの教育博物館のみであるという。

- 23) 逐語記録をみると、芸術コレクションに関する記述は教授関連コレクションに関する記述の約6倍にもものぼる。
- 24) レイヤード (1817-94) は、英国のアッシュリア学者、外交官。ニネヴェのアッシュリア遺跡を発掘し、多くの遺跡と古文書を得て大英博物館を飾った (岩波書店編集部編集『岩波西洋人名辞典 増補版』岩波書店、1981年)。
- 25) 溝上は「教材普及促進所」と、石附は「教育用品収納所」と訳出している (注9文献、59頁と、注5文献、440頁)。
- 26) ジールホルストの報告内容は、注14史料、pp.74-76による。
- 27) 逐語記録をみると、ジールホルストの報告記録はホジンスの報告記録の5分の1程度である。
- 28) ミゲルカの報告内容は、注14史料、p.76による。
- 29) ホイトの発言内容は、注14史料、p.77による。
- 30) トラヴェリーの発言内容は、注14史料、p.78による。
- 31) フェルプスの発言内容は、注14史料、p.78による。
- 32) 注20史料、738頁。
- 33) 米国百年期博覧会におけるオンタリオ州の教育展示について、「加奈太諸州中教育最モ盛ンナルハオンタリオ州ニシテ米國中教育隆盛ノ名アル諸州ト比肩スルヲ得可シ」と高く評価されている (田中不二磨『米國百年期博覧會 教育報告』第4巻、文部省、1877年、24丁)。
- 34) 「北米記行」には、阿部がフィラデルフィア博覧会に参加することが決まった1876年4月から、博覧会終了後に帰国するまでの期間における日々の日記が綴られている。日記の記述は阿部の行動に基づくものであるが、8月25日にフィラデルフィアを発ってからトロント市内を見学するまでの間、阿部は田中とともに移動していたと考えられるため、阿部の行動を田中に当てはめても差し障りないと判断した。
- 35) Map of Toronto, *Illustrated Historical Atlas Country of York*, Miles & Co., 1878, pp.26-27.
- 36) “A Centre for learning: The Educational Department Building, 1851-1962” <http://www.archives.gov.on.ca/english/on-line-exhibits/education/education-centre.aspx#floor_plan> (last access 2009.6.16)
- 37) 注9文献、57-61頁。
- 38) 注20史料、738頁。
- 39) 注9文献、61-63頁。
- 40) 注3史料。
- 41) 「教育博物館年報」文部省『大日本帝國文部省年報第五年報』1877年、457頁。
- 42) 注10文献、29頁。
- 43) 注41史料、457頁。
- 44) 注20史料、739頁。

⁴⁵⁾ 注3史料。

⁴⁶⁾ 注41史料、458-459頁。

⁴⁷⁾ 「教育博物館年報」文部省『大日本帝國文部省年報第六年報』1878年、357-358頁。

※引用文中の〔 〕内、下線部、傍点は筆者による。

The Adoption of Information of Educational Museum

by Tanaka Fujimaro

TAKADA Asami

This paper examines what kind of information Tanaka Fujimaro, who was the vice-minister of education and played a leading role in establishing the Educational Museum in Japan in 1877, adopted from educational museums in Western countries.

The Educational Museum in Japan, the predecessor of present National Museum of Nature and Science, was the first museum which collected the instruments of education and natural history, exhibited collections based on the scientific system of classification, and produced the educational instruments such as experimental devices.

When Tanaka attended International Conference on Education held during the Centennial Exposition and visited the Educational Museum in Toronto in 1876, he had an opportunity to receive information about educational museums in the West.

In the conference, John G. Hodgins reported the exhibition of the collections related to teaching and the art, especially emphasizing the latter. Then, G. Seelhorst made a report that the Museum of Nuremberg exhibited the industrial art collections. Nevertheless, most of the questions asked to Hodgins were related to educational activities in the Educational Museum in Toronto. In addition, in the time for opinion exchange speakers seemed to have interests in the educational activities in educational museums without giving any opinion about the art or the industrial art collections.

After the conference, Tanaka visited the Normal School in Toronto containing the Educational Museum and the Educational Depository. At that time, the Educational Museum put emphasis on the art collections as stated above. However, he seemed to get interested not in them but the educational collections.

As a conclusion, this paper reviews information that Tanaka adopted from Western countries by investigating the concept of established the Educational Museum in Japan. I pointed out three ideas which Tanaka adopted to establish the Educational Museum in Japan. These are as follows: 1) Collecting the instruments related to elementary and secondary education. 2) Mainly for the teachers. 3) Having the function like the Educational Depository.

This paper suggests that Tanaka referred to not only the Educational Museum in Toronto but also International Conference on Education in establishing the Educational Museum in Japan.